審査の結果の要旨

氏名　柴田　崇

本論文は、M・マクルーハンとJ・J・ギブソンのメディウムの概念を比較し、メディア研究に新しい観点を提供することを目的としている。二人の著作を中心に関連文献を一次資料とする文献学的方法が用いられている。文献読解には、ヨーロッパ思想史において技術を身体と関連させるために用いられてきた extension の概念と情報理論の二つを文脈として用いている。一見、接点のない二人の思想は、情報理論への批判から出発し、extension の概念を使って道具（人工物）の理論を再構築した点では共通の地盤を持つことが示されている。

三部構成の第Ⅰ部では、まず、19 世紀後半にイタリアのG・マルコーニによる電信の実用化に由来する「送り手と受け手の媒介」というメディウム概念が、1940 年代終わりにC・シャノンとW・ウィーバーの情報理論(通信モデル）で定式化され、さらにR・ヤコブソンの言語モデルで一般化した経緯がたどられる。マクルーハンは、このメディア概念を批判し、身体を含むメディア環境全体を記述する必要性を説いた。こうしてマクルーハンのメディア論が構築されたことはよく知られているが、本論文では、マクルーハンの用いた extension に、(1)人工物と人間の境界である「延長」、(2）人工物による人間の機能の拡大（縮小）を主題とする「拡張」、(3)人工物は身体の内的機構が体外に投射されたものだとする「外化」の三種の意味があることを指摘している。そして三つの概念が、それぞれデカルト、プラトン、ヒポクラテスに起源を持つことも明らかにしている。第Ⅰ部では、マクルーハンのメディア論が、上記の三種の extension を統合した論としてはじめて理解できることが論証されている。

第Ⅱ部では、マクルーハンと同様に通信モデルを批判したギブソンが、人工物の考察において「延長」の概念を使用したことが指摘され、その意義が、同時代の心理学者F・ハイダー、D・カッツ、E・ホルトの主張と比較することで検討されている。ギブソンは、物質、メディウム（媒質)、そして両者の界面である表面の三つで環境が構成されているとした。人工物は、その使用時には身体という物質に、使用されていない時には環境中の物質に、分類された。この区分は、ギブソンと同様に環境の心理学の創出に取り組みながら、すべての人工物はメディウムであるとしたハイダーとは対比的である。カッツは、使用時の人工物を身体とは別個の対象として、それ自体の特性を記述しようとしたが、このカッツの研究は「使用時の人工物は身体である」として、人工物使用の心理学的意義についての議論の焦点を環境の方へと移行させたギブソンの独創性を浮かび上がらせる。最後にホルトとの比較は、ギブソンのアプローチが、有機体と環境との関数関係に着目したホルト独自の行動主義に由来すること、さらに「心」を対象と主体との関係と捉え、「心」を「体」と同亜 w)･黷フ実体としたデカルト二元論を覆す観点を内包していたホルトの機能主義にギブソンが深く影響されていたことを明らかにした。こうして第Ⅱ部では、「延長」の系譜に連なるギブソンの人工物論が、ホルトの思想を継承することでデカルトの枠組を超える可能性を持つことが示唆されている。

以上を踏まえた、第Ⅲ部では、マクルーハンのメディア論にギブソンの理論をつなぐことで、メディア論に新たな視界が開かれることが示されている。身体を包摂するものとしてメディア環境を理解しようとしたマクルーハンは、メディア環境のメッセージを「刺激」の概念で捉えようとしていた。マクルーハンは環境を知覚するには、対象からの刺激、刺激が器官に引き起こす感覚、そして感覚を統合する「心」が必要だとしたが、これは「知覚は感覚にもとづく」とするデカルト主義を引き継ぐものである。刺激に代えて、動的身体が周囲の環境のエネルギー流動に探索する「情報」の概念を提出したギブソン知覚論は、マクルーハンのメディア論を再構築する際に手がかりになり得ることが示唆されるのである。

このように本論文は、マクルーハン・メディア論における extension の概念の系譜を特定するとともに、ほぼ同時期の２０世紀北米に誕生した思想でありながら、従来ほとんど関連づけられることのなかったマクルーハンとギブソンの理論を貫くことでメディア研究に新たな視点を提供している。これらの点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達していると判断される。